

## 論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名：邱淑婷（ヤウ・シュクティン）

邱淑婷氏の博士学位請求論文「香港・日本映画交流史——アジア映画ネットワークのルーツを探る」は、近年めざましい発展を見せるアジア映画を、日本映画と香港映画の相互影響関係を軸に、映画人のネットワーク形成史として解明した画期的な試みであり、今後の香港映画史研究にとって基礎的な文献となる論考である。1930年代から90年代までの香港における映画の発展を、各国映画人の交流という視点で横断的に捉え、戦争やスタジオ・システムの変遷、さらにはグローバリゼーションという人的移動を促す時代の変化が、どのように新たな映画芸術を構築していくか、その過程を考察した刺激的な企てである。

本論文の独自性は、広範な文献調査と多くの映画人に対する綿密なインタビューに基づき、これまで当事者の断片的な回想で語られてきた史実を掘り起こし、香港映画史の空白を埋め、新たな映画史の記述を可能にした実証性にある。なかでも1950年代後半以降に日本の映画人が香港で多くの映画制作に携わった経緯は、本論文によって初めて総合的にまとめられ、従来の香港映画史が書き換えられることとなった功績は評価されよう。公開終了後は映画作品を見る機会がほとんどなく、また制作に携わった映画人の本名がクレジットに記されないなど、香港映画の実証的研究には基礎的資料の不足が深刻な問題であった。本論文には、日本と香港の映画人20名のインタビュー記録と香港抗日映画目録（1934－1941）、上海租界日本映画上映目録（1942－1945）、日本人が関係した香港映画目録（1942－2001）、香港日本映画大事記（1930－1979）、主な人物小伝などの膨大な資料が付されており、今後の香港映画研究に資するところは大きい。

本論文は全五章から構成される。まず第一章「戦前・戦中における香港と日本の映画交流」では、1930年代から太平洋戦争の勃発による日本軍の占領期の香港映画史が概観される。香港は抗日映画制作の基地であり、日本軍の占領後は映画人の脱出や日本への協力の拒否などにより、具体的な日中の映画交流は実現しなかった。占領期の映画仕事を担当した報道部の和久田幸助は、日中双方から非難され、映画史でも扱われてこなかった人物だが、彼を日中の狭間に落ちた悲劇の人物として再評価したのは、本論文が最初である。

第二章「中華電影における日中映画交流」では、日本占領下の上海で映画制作を行った中華電影をめぐる日中の映画交流が記述される。中華電影については、中国では対日協力映画として無視され、日本では川喜多長政と張善琨の協力を美談として語られることが多かったが、本論文では新たに発見された中華電影の雑誌『新影壇』を手がかりに、多岐に渡った映画交流の経緯が明らかにされる。本論文によって初めて明らかとなった事実は多く、中華電影における日中の映画人の接触が、戦後のアジア映画ネットワークを構築する基礎となったという指摘は、説得力をもつ。中華電影を大東亜映画の一環として利用しよ

うとした日本側の意図を分析した点も評価された。

戦後から 1950 年代前半までの香港映画史を扱う第三章「香港・日本映画交流を促進する理由」は、中国革命の進展により左右に分裂した香港映画界と日本の関係を、上海映画人の香港移転や中国革命による映画市場の変化を軸に、日本映画の国際進出と東南アジア市場の開拓をも視野に入れつつ詳述する。マーケットから映画史を記述する試みは、香港映画の考察には欠かせない視点であり、ここではその効果を上げている。香港では 50 年代初頭に日本ロケを行う作品が唐突に登場するが、従来は謎とされたこの作品群を、台湾市場との関係から分析したのは、本論文の成果である。

1950 年代から 60 年代にかけての香港と日本の映画会社の提携を記述した第四章「香港と日本の映画交流の黄金時代」は、本論文の白眉ともいべきだろう。電懋と邵氏という香港の二大映画会社と日本映画界の関係が的確に記述され、とくに邵氏が大量に招聘した日本映画人による映画制作の経緯が、映画人の証言をもとに初めてまとめられた。日本の時代劇と香港の新武侠映画の関係や香港の歌謡映画に対する服部良一の貢献、中平康や井上梅次、西本正など重要な働きをした映画人の事跡が詳述される。香港のスタジオ・システムの隆盛と日本映画界の斜陽化が、映画人の移動を促し、香港映画の黄金時代を築く一方で、日本映画にも一定の影響を与えたという記述は、肯定されよう。

第五章「70 年代以降の交流及び香港映画と日本映画の相互影響」は、日本と香港の映画制作が前後してスタジオ・システムから独立プロへ移行するに従い、映画交流が多様化して現在に至る過程を概観する。日本における香港映画の受容には、カンフー映画のヒットなどスターの魅力だけでなく、日本映画の影をそこに見たからだという指摘は興味深いが、より作品に即した分析が必要との意見も、審査委員から出された。

最後に本論文は、80 年代の香港、中国、台湾、韓国のニューウェーブの登場以降、現在ではかなり一般化した映画人の相互乗り入れというアジアにおける映画のネットワークが、かつての戦時下から存在したそれを受け継ぐものであり、歴史の積み重ねの上に開花したと結論づけている。

第二次大戦時の日本による「大東亜映画」の提唱が、日中の映画人の交流を生み、結果として香港を中心とする映画のネットワークを構築していったという本論文の論考は、これまで扱われることのなかった問題を、あえて映画の作品論には踏み込まず、映画技術の伝播と制作環境の変遷など映画を取り巻く環境に焦点を絞った上で、通史として初めて記述したものであり、その功績は高く評価される。その点で審査委員の意見は一致した。すでに本論文の一部は、香港の学会で報告され、香港や中国、韓国でも高く評価されている。文献資料の扱いや注の一部に不備が指摘されたが、それらは瑕疵にすぎず、本論文の成果を損なうものではないという点でも、審査委員の意見は一致をみた。

したがって、本審査委員会は全員一致で、邱淑婷（ヤウ・シュクティン）氏の提出論文を博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定した。